

研究主題

伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発 —グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して—

研究部

1. はじめに

本校は平成29年度より2年間、国立教育政策研究所の研究指定を受け、伝統文化教育に取り組んでいる。本校が伝統文化教育に関する研究に取り組むことになった背景としては、次の二点があげられる。

- ・本校の学校教育目標と伝統文化教育との関連が深いこと。
- ・これまでの本校の教育研究の成果が伝統文化教育の研究に活かせること。

これらのことについて、次に説明を加える。

(1) 本校の教育目標と研究の流れ

本校は教育目標とそれを受けて目指す生徒像として以下のように掲げている。

学校教育目標：「自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒を育成する。」

- 目指す生徒像：①自ら考え学ぶ生徒
②お互いに認め合い、助け合う生徒
③心身ともにたくましい生徒

学校全体の教育活動の中でこれらの実現を目指し、様々な具体的活動に取り組んでいる。これらの目標や目指す生徒像、使命を踏まえてこれまでも年度ごとに研究テーマを定め、日々の学校の教育活動やそれに伴う研究を行ってきた。

(2) ESD研究

平成26年度からの3年間は学校教育目標の「社会的使命を果たす生徒を育成する」をより効果的に達成するための方策を開発するため、ESD研究をすすめ学校の各教育活動に取り入れ、その成果と課題について考察をおこなった。ESD研究に取り組むにあたり、その前年度までの研究の成果と課題について平成26年度本校紀要では以下のように述べている。

「本校では昨年度まで、『思考力・表現力・判断力の育成』を目指し、その中でも特に『思考力』に焦点をあて、課題を解決するために必要な思考力を育成するために、1)『思考の型』を取り入れて、2)『思考するための手立て』を工夫するなど、実践を積み重ねてきた。しかし、生徒が課題を解決する方法を各教科等で学んだとしても、その方法が、教科の枠の中でしか使えなかったり、ある単元のみの特化したりするなど、学習したことの広がりを感じられなかった。昨年度の本校研究紀要に

も、『思考の型』や『思考の手だて』を統合するなどして、『思考力を育成する学校全体の取り組みをさらに深めていく必要性』が課題として取りあげられている。すなわち、生徒には、将来、社会の形成者として必要な、教科の枠を超えた課題解決の力が十分に身につけていないといえる。その中で、本校教員も、内容的に類似している取り組みをつなげたり、教科間で連携して共通して身に付けさせたい力を育んだりすることで、学習したことが広がりを見せ、生徒の教科の枠を超えた課題解決の力に総合的につながっていくのではないかと感じ始めていた。そこで、今年度より、教科の取り組みをつなげ、生徒の総合的な課題解決の力を育む方向で研究を行うことにしたが、そのために、教員全体が共通して取り組める課題解決のテーマとして、E S D (Education for Sustainable Development) を取りあげることにした。」

(金沢大学附属中学校 研究紀要第 57 号 2015.2)

つまり、E S D 研究に取り組むに当たっては、それまでの本校の教育の特色として各教科等が積極的に生徒の資質や能力を育成する手立てについて開発をしているということが長所でありながら、同時に教科間で連携して取り組むことや、教科の枠を越えることで育成をねらうことのできる資質・能力についての考察が不足しているという短所があるという課題があった。そこで、それらの長所・短所を踏まえて学校全体で取り組むものとして、E S D 研究が適していると考え、取り上げることとなった。

(3) E S D 研究を経て

本校では、平成 26 年度から平成 28 年度の三年間 E S D 研究に取り組んできた。特に平成 26 年度と 27 年度の二年間は国立教育政策研究所の研究指定を受け、研究発表会などを通して研究の成果を広く発信してきた。前述のように、本校の教育目標と E S D との目指すところの共通点をスタートとし学校の教育活動全てで携わる E S D を目指して学校研究を始めた。それまでも、本校では、言語活動に注目した思考力の育成に関する研究や思考の型に関する研究を各教科等が取り組んでおり、学校全体をあげて研究に取り組む体制があった。そこで E S D を進めるに当たっては、全ての教科等が関わることを前提とし、教科等横断的なカリキュラムの開発を目指した。3 年間の E S D 研究の取り組みの成果と課題は以下のようなものである。

平成 28 年度 研究の成果と課題

ア 成果

- ・本研究は、教科等の授業でこのように E S D の授業ができる、といった実践提案型の研究である。教材の「つながり」を図ったユニットや、E S D の実践事例を数多く完成できたことがまずは成果である。
- ・実践が多い能力・態度に関して、せいとも教科等の授業を通して自分に能力・態度が身に付いたことを実感している。
- ・教科等の授業を通して E S D を実践していく方向性が、教員で共通理解できたことも成果である。
- ・カリキュラムマップの作成により、実践の全体像を可視化できたことが成果である。今後、さらなるカリキュラム・マネジメントにつなげていける。

イ 課題

- ・能力・態度と教科等の力のさらなる整合性を図ることが今後の課題である。さらに、それぞれの能力・態度を、各教科等がどのように分担していくかを考え、実践していくことも課題である。
- ・カリキュラムマップをもとに実践が少ない分野や能力・態度の時期をどうするか、また、それぞれの実践を、能力・態度間のつながりも含めて、全体的につなげていくことが課題である。
- ・実践提案型の研究から、実際の諸問題解決の研究へと移行するかどうか、そのためにも、総合的な学習の時間との関係性を考え、実践していくことが今後の課題である。

(金沢大学附属中学校 研究紀要第 59 号 2017.2)

昨年度までの本校研究を振り返ると、本校の特性として以下のことがあげられる。

- ・各教科等がそれぞれの教科等の特質を踏まえつつ継続して取り組んでいる。
- ・学校全体のカリキュラムマネジメントに関して全教科等が積極的に関わっている。

このような本校の教育研究に関する土壌を活かし、今年度の伝統文化教育をすすめられるような研究の体制や方策について考え、以下のように研究テーマを設定した。

平成 29 年度 研究テーマ

伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発
ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー

2. 今年度の研究

今年度、伝統文化教育を柱として学校の教育研究に取り組むにあたり、これまでの研究の成果を踏まえ、本校の特色生かす研究とするため、次のように研究の方針と目標を設定した。

研究方針：各教科等の連携による体系的な伝統文化に関する教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究を行い、校外外に研究成果を発信する。

研究の目標：

伝統文化教育に関わって

1. 各教科等で学んだことを自分たちの現在や将来の行動につなげられる生徒を育てる。
2. 教科等横断的なカリキュラムの開発を目指す。
3. 伝統文化教育の推進と各教科等の思考力・判断力・表現力との関連性を明らかにする。

(1) 教科等横断的なカリキュラムの開発について

これまでの ESD の取り組みなどから、本校では教科等が連携して教育活動に取り組む体制がある。この特性をいかして、より効果的な教科等横断的なカリキュラムの開発に取り組むたいと考えた。教科等横断的なカリキュラムの開発に関しては、平成 28 年 12 月の中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」に以下のように示されている。

「生きる力」の育成に向けた教育課程の課題

(1) 教科等を学ぶ意義の明確化と、教科等横断的な教育課程の検討・改善に向けた課題

教育課程において、各教科等において何を教えるのかという内容は重要ではあるが、前述の通り、これまで以上に、その内容を学ぶことを通じて「何ができるようになるか」を意識した指導が求められている。特にこれからの時代に求められる資質・能力については、第5章において述べるように情報活用能力や問題発見・解決能力、様々な現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力など特定の教科等だけでなく、全ての教科等のつながりの中で育まれるものも多く指摘されている。重要となるのは“この教科を学ぶことで何が身に付くのか”という、各教科等を学ぶ本質的な意義を明らかにしていくことに加えて、学びを教科等の縦割りにとどめるのではなく、教科等を越えた視点で教育課程を見渡して相互の連携を図り、教育課程全体としての効果が発揮できているかどうか、教科等間の関係性を深めることでより効果を発揮できる場面はどこか、といった検討・改善を各学校が行うことであり、これらの各学校における検討・改善を支える観点から学習指導要領の在り方を工夫することである。

中央教育審議会 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」文部科学省 2016.12.

また、伝統文化教育を通して育みたい資質・能力を考えた時に、次期学習指導要領に向けた指針としての以下のまとめを参考とした。

平成28年8月 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」

現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力

(グローバル化する社会の中で)

○グローバル化する社会の中で世界と向きあうことが求められている我が国においては、自国や他国の言語や文化を理解し、日本人としての美德やよさを生かしグローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力の育成が求められている。前述(4)で述べた言語能力を高め、国語で情報を的確に捉えて考えをまとめ表現したりできるようにすることや、外国語を使って多様な人々と目的に応じたコミュニケーションを図れるようにすることが、こうした資質・能力の基盤となる。加えて古典や歴史、芸術の学習等を通じて、日本人として大切にしてきた文化を積極的に享受し、我が国の伝統や文化を語り継承していけるようにすること、様々な国や地域について学ぶことを通じて、文化や考え方の多様性を理解し、多様な人々と協働していくことができるようにすることなどが重要である。

※「グローバル人材」…要素 i : 語学力・コミュニケーション能力

要素 ii : 主体性・積極性、チャレンジ精神、
協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素 iii : 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー
(グローバル人材育成推進会議)

中央教育審議会 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」文部科学省 2016.8.

これからの社会において求められる資質・能力について、伝統文化教育を通して育成したいと考えた時、ここで示されている「グローバル人材」の要素 i～iii の育成を具体的な目標とすることができる。また、これらの要素は各教科等で独立して育成できるものではなく、各教科等の枠を越えて育成をねらえるものとして適切である。そこで、本校の研究テーマの副題を「一グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して一」とし、その育成に取り組むたいと考えた。

また、育成を求められる資質・能力については前掲の記述に続き以下のようにある。

(現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力と教育課程)

○このように、現代的な諸問題に対応して求められる資質・能力としては、以下のようなものが考えられる。

- ・健康・安全・食に関する力
- ・主権者として求められる力
- ・新たな価値を生み出す豊かな創造性
- ・グローバル化の中で多様性を尊重しつつ、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史に関して理解し、伝統や文化を尊重し未来を描く力
- ・地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力
- ・自然環境や資源の有限性の中でよりよい社会をつくる力
- ・オリンピック・パラリンピックを契機に豊かなスポーツライフを実現する力

○これらが教科等横断的なテーマであることを踏まえ、それを通じてどのような資質・能力の育成を目指すのかを三つの柱に沿って明確にし、関係教科等や教育課程全体とのつながりの整理を行い、その育成を図っていくことができるようにすることが求められる。

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」文部科学省 2016.8

本校でも教科等を越えた視点で教育課程を見直し、教育課程全体として効果を発揮できる場面について明らかにしたいと考えている。今年度は全ての教科等が伝統文化に関する学習に取り組み、その中で育むことのできる資質・能力について仮説をたて、実践研究をすすめた。次年度はその仮説の検証とともに、各実践について検討と精選をすすめ、教育課程全体の工夫と改善につなげたい。

(2) 伝統文化教育について

伝統文化教育は、各教科等や総合的な学習の時間などで行われて来た。平成18年12月に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」と言及された。これを受けた平成20年1月の中教審答申「伝統や文化に関する教育の充実」では、以下のように述べられている。

国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である。世界に貢献するものとして自らの国や郷

土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる。また、伝統や文化についての深い理解は、他者や社会との関係だけではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である。このため、伝統や文化の理解についても、発達の段階を踏まえ、各教科等で積極的に指導がなされるよう充実することが必要である。

中央教育審議会 「伝統や文化に関する教育の充実」 文部科学省 2008.1

とされ、各教科等で積極的に扱うことが改めて強調されている。またその目的は国際社会で活躍する日本人の育成であることとされている。

現行の学習指導要領の施行と並行して、様々な伝統文化教育に関する取り組みが行われている。その一つが平成17年より国立教育政策研究所が行った「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」である。この事業では全国から100校程度を募集し、伝統文化に関する教育の教育課程における位置付けや指導の内容・方法などに関する実践研究や、外部の人材や団体との効果的な連携の方策について研究の課題として設定した。その事業を経て、平成24年には同じく国立教育政策研究所が「学校全体としての各教科等の連携による体系的な伝統文化に関する教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究」として研究指定事業を開始し、今年度に至るまで継続して事業を行っている。

また次期学習指導要領へ向けて、様々な動きがある中、伝統文化教育に関しては、平成27年8月「論点整理」に次のようにまとめられている。

日本のこととグローバルなことの双方を相互的に捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるよう、自国と世界の歴史の展開を広い視野から考える力や、思想や思考の多様性の理解、地球規模の諸課題や地域課題を解決し持続可能な社会づくりにつながる地理的な素養についても身に付けていく必要がある。

中央教育審議会 教育課程企画特別部会 「論点整理」 2015.8.

自国に関することと世界のことを同時に広く捉えて、グローバル社会で生きるための素養を身に付けることの重要性が指摘されている。また平成27年12月の中教審答申の「2030年を見据えて子供たちの育てたい姿」には「社会的・職業的に自立した人間として、我が国や郷土が育んできた伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、理想を実現しようとする高い志や意欲を持って、主体的に学びに向かい、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができること。」ともあり、これからの社会で広く育成すべき内容について、伝統文化教育が担っていくことが示されている。

このような流れの中で、これまでも伝統文化教育に関する多くの実践が行われてきた。それらの実践の課題のとして、伝統文化教育を担うのが総合的な学習に集中しがちであり各教科等での取り組みが希薄になりがちであるということや、目的が自国への愛着や自国の文化の理解に留まりがちであり世界的な視野の獲得までに至らないということなどが挙げられている。これらの課題を踏まえた上で、これからの伝統文化教育として「互いの文化を尊重する発信型のグローバル化」をあげている実践などが、これからの伝統文化教育が目指す方向としてあげられる。

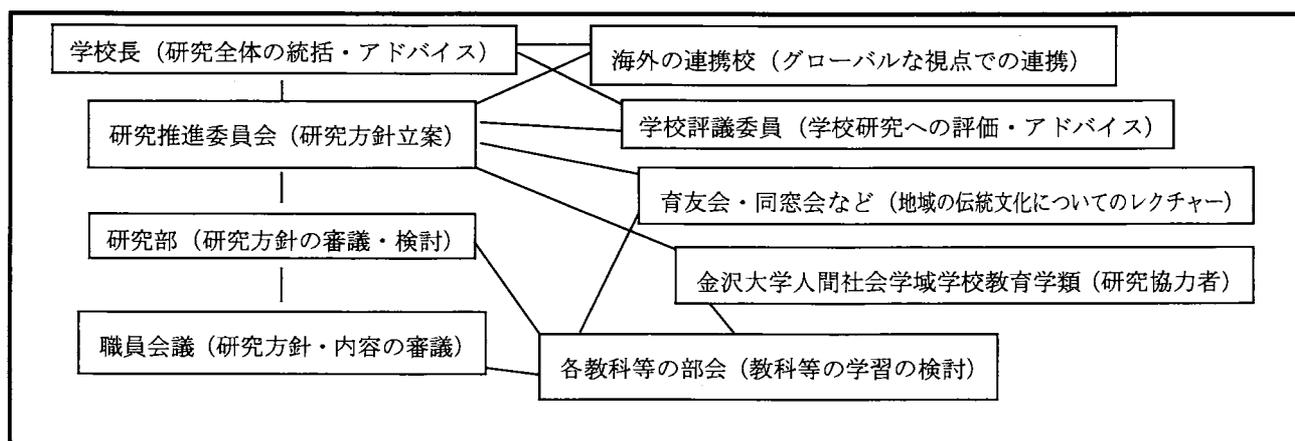
(3) 研究の方策・研究体制

研究の視点：全ての教科等が関わったこれまでのE S Dの取り組みを基盤とする。教科等の授業をベースとしつつ、伝統文化教育にそれぞれの教科等がどのように関わることができるのかを明らかにし、教科横断的な単元（題材）の開発をする。その上でそれらの学習の中で伝統文化教育を通して、一人一人の生徒がグローバル社会に生きるために必要な資質・能力をどのように身に付けていくのかを検証し、その育成のためにより有効な方策を開発する。

研究の手立て：3年間のE S D研究を通して得た、教科等の連携やカリキュラムマップの作成の経験を活かし、伝統文化教育に関して、全ての教科等が関わった3年間のカリキュラムマネジメントを行う。伝統文化教育を柱として、生徒の視点に立ったカリキュラムマップの作成を試みる。

- ・平成 29 年と 30 年の 4 月と 12 月に伝統文化教育に関するアンケート調査を生徒・保護者・教員を対象に行い変容の傾向を分析する。生徒の伝統文化に対する興味・関心がどのように高まり、どのような資質・能力が身に付いたのかを記述する。
- ・各教科等の授業で生徒の学習過程や思考の様子をワークシートなどの記入の内容から分析する。各教科等で育成したい資質・能力がどのように育まれているのか見取る。
- ・本校研究発表会の場で参会者から意見を求めるとともに、アンケート調査を行い本校の取り組みや生徒の実態について成果や課題を点検する。
- ・金沢大学人間社会学域学校教育学類の研究協力者（大学教員・他校種附属教員）から学校生活や授業での生徒の変容について評価を得る。
- ・年間 5 回程度行う各教科等の研究授業後の整理会に生徒を参加させ、各授業でどのような資質・能力が育まれているか生徒自身の意見を聴取する。

研究体制



(4) これまでの取り組みと実践

○校内研究会

伝統文化教育に取り組むにあたり、今年度に先駆けて昨年度2月より準備を始めた。国立教育政策研究所の研究指定の応募にあたり、本校での取り組みの方向性を検討し2年間の研究の進め方について計画を立てた。

①第1回校内研究会（4月6日）

研究の計画について全教職員で確認を行った。はじめに、これまでの伝統文化教育について概要を把握し、学習指導要領を参考にしながら、今なぜ伝統文化教育に取り組むことが重要なのか、ということについて全教職員が理解し今年度の研究に向けての基礎的理解とした。その中で本校の研究では、①全教科等が連携して伝統文化教育に取り組むこと ②伝統文化教育を通して育成を目指す資質・能力をグローバル人材の要素ⅰ～ⅲと仮定して実践に取り組むこと の二つを申し合わせた。学年別の3グループに分かれてワークショップを行った。まずはじめに伝統文化について「生活文化」「伝統文化」「地域文化」「現代の日本文化」があることを踏まえて、それぞれの教科が伝統文化についてどのような文化を扱い、どのような要素の育成に関われそうかを各自が考えグループごとに表を作成した(図1)。またそれらの実践の可能性の内容から、実際に今年度中に取り組むものを選び出し、各学年の年間計画表上において各教科等の取り組みを全体で可視化できる表とした(図2～4)。これらの表を職員室の休憩スペースに掲示し、全教職員の目に触れやすいものとするにより、教科同士が連携したり、教科等横断的な実践について考える材料とした。

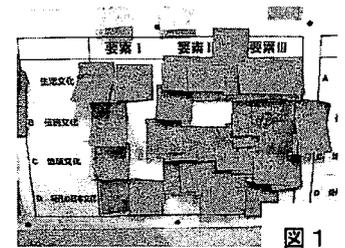


図1

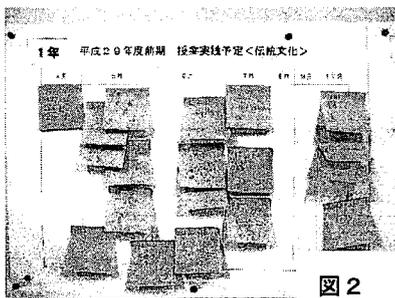


図2

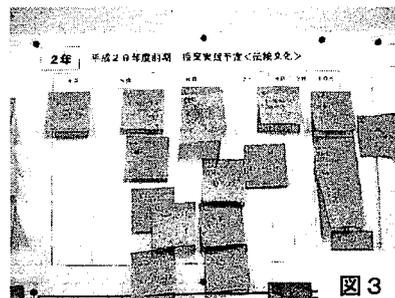


図3

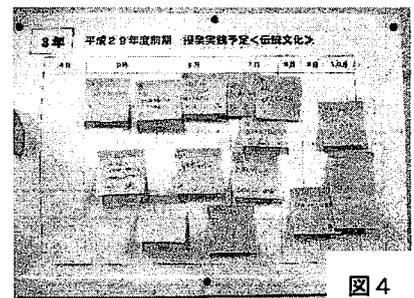


図4

②第2回校内研究会（4月25日）

2年間の研究計画(国立教育政策研究所に提出のもの)をもとに、具体的な実践に向けた申し合わせを行った。昨年度までのESD研究で取り組んだ校内研究会(プチ研)の実践を今年度バージョンに手を加えて利用し、どのような伝統文化に関する授業の中で、どのような資質・能力の育成をねらうのかを示せるものとした(図5)。年間2回実施するアンケートについて、内容を検討した。5月、6月に行う校内研究授業について、そのねらいなどについて確認をした。

プチ研 記録用紙

年度	期	日	時間	場所
平成29年度	前期	4月25日	15:00～17:00	職員室

議題：① 研究の目的・意義、② 研究の進め方、③ 研究の成果の活用

出席者：校長、副校長、教務主任、各教科主任、教員代表、PTA代表、関係者

議事録：研究の目的・意義、研究の進め方、研究の成果の活用

研究の目的・意義：伝統文化の継承と発展、グローバル人材の育成、地域活性化の推進

研究の進め方：① 調査研究、② 実践研究、③ 成果の活用

研究の成果の活用：① 授業実践、② 教材開発、③ 地域連携

世界三大食作法

① イタリア料理 ② フランス料理 ③ 日本料理

① イタリア料理 ② フランス料理 ③ 日本料理

① イタリア料理 ② フランス料理 ③ 日本料理

図5

③第3回校内研究会（5月26日）

各学年で一つの研究授業を行った（1年社会，2年社会，3年英語）。全教職員がいずれかの授業を参観した後，授業整理会の形で伝統文化との関連や，育成したい資質・能力についてなど意見を交換した。また今後の連携の可能性について各教科等の内容を踏まえて検討した。



1年生 社会 研究授業

④第4回校内研究会（6月27日）

渡村教諭による2年生英語の研究授業を行った。授業を全教職員が参観し，全体での授業整理会を設け，本校の伝統文化教育の方向性や連携の可能性などについて検討した。4月より指導を受けている国立教育政策研究所の藤野敦調査官にも参加をいただき，これまでの本校の取り組みや本日の授業，今後の実践について講演会の形でレクチャーを受けた。本年度より研究に関する協力をより深めたいと考えている金沢大学教職大学院の教職員，院生にも参加をいただき，研究についての説明を行い，本日の実践やこれまでの研究に関する意見の交換の場となった。



2年生 英語 研究授業

⑤第5回校内研究会（7月24日）

第1回校内研究会などで計画していた実践について，全教職員で確認・検討を行った。これまでの実践をもとに，連携が図れそうな実践の案を出し合ったり，11月の研究発表会に向けて教科等横断的に扱える内容がないか考えたりした。

⑥第6回校内研究会（10月17日）

これまでに行われた実践のうち，授業記録が残っているものに関して，その内容について検討し，今後の課題や研究の方向性について話し合いを持った。またその内容を踏まえ，各教科等から出された11月の研究発表会の授業案について検討した。

3年生	4月	5月	6月	7・8・9・10月
i 語学力・コミュニケーション力		522 数学 (国・英) 526 英語 (社・道)		830 数学 (理)
ii 主体性・積極性・チャレンジ精神・協調性・柔軟性・責任感・使命感	414 数学 (理)	525 理科 (社・英)	音楽 627 国語 (音・社) 627 社会 (国・家・音)	
iii 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ		522 数学 (国・英) 526 英語 (社・道)	626 数学 (音・美・英・社)	1006 数学 (理) 718 理科 (英・数・美)

4月からの実践について，育成をねらったグローバル人材の要素と他教科等との連携に学年ごとの表に示した。「522 数学 (国・英)」は，5月22日に実践の数学の授業で，国語と英語との連携の可能性が考えられることを示す。

○研究授業

前述の第3回校内研究会と第4回校内研究会において、それぞれ3コマと1コマの研究授業を行った。第3回の研究授業では、各学年に1コマの研究授業を設け、その学年の授業で連携の可能性が考えられる教員が参観をし、授業整理会を持った。1年生と2年生は社会の授業を、3年生は英語の授業を行ったが、これらはその授業から連携の可能性が広がりやすい授業を設定した。そのため、授業整理会では当日の研究授業を中心にして各教科等が連携の可能性を考え合う場となった。

また国立教育政策研究所の調査官を招いて指導を受けたり、金沢大学教職大学院の教員・院生の協力を得たりして、研究を多方面から捉える機会としている。

○授業実践

本校では平成26年度から3年間、E S D研究に取り組んだ。その中では、今年度の研究にも共通する「全教科等で取り組む」「教科等横断的な実践を開発する」などの目的を持ち、カリキュラム・マネジメントを行った。3年間を通した研究の成果として、全教科等の指導計画を一枚表の形にした「カリキュラム・マップ」があげられる。これらの開発のベースになったのが「プチ研」と校内で呼ばれている研究授業である。

学校研究に取り組むにあたって、各教職員が実践の簡易な指導案を作成して全教職員で共有し参観し合う趣旨から行われた。普段の授業について、様々な見方から意見を集めたい時や、他教科等との連携のヒントにしてほしい時などに、「気軽に行える小さな研究授業」という意味合いで「プチ研」と名付けて継承されてきた。本年度もこれらの取り組みを重ねて、試行錯誤を重ねながら大きな研究へとつなげていきたいと考えている。

(5) 次期学習指導要領へ向けて

現行の学習指導要領では子供たちの「生きる力」の育成をより一層重視している。その「生きる力」については、「思考力」「基礎力」「実践力」が根幹であり、21世紀を生き抜くための実践的な問題解決力・発見力の育成につながるように構造化したものが「21世紀型能力」である。このような能力を育むために、平成26年3月「論点整理」では、教育の目標や内容の在り方について、「問題解決能力や論理的思考力、メタ認知など、教科等を横断して育成されるもの」と「各教科等で育成されるもの（教科等ならではの見方・考え方など教科等の本質に関わるものや、教科固有の個別の知識やスキルに関するもの）」といった視点で交互に関連付けながら位置付けなおしたり明確にしたりすることが示されている。そして次期学習指導要領は、育成すべき資質・能力を明確にし、そのための教育課程の在り方を示している。次期学習指導要領の趣旨を踏まえ、本校の教育研究について検討し、本校の教育課程の在り方や、本校が育成をねらう資質・能力について整理・設定をした。そこで試作したものが本校のグランドデザイン(P19～20)である。これまでも本校では「生きる力」や「21世紀型能力」の育成に関わって、様々な検討を行ってきたが、次期学習指導要領でより明確にされた社会に開かれた教育課程の在り方と、カリキュラムマネジメントの重要性の観点から学校全体の教育活動について再検討をした。特に「確かな学力」の育成については、「何ができるようになるか」という育成を目指す資質・能力を明確にした上でカリキュラムを編成する取り組みを行った。

平成 28 年 12 月 21 日に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」において、次期学習指導要領の改訂について以下のように述べられている。

「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、次の 6 点にわたってその枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラムマネジメント」の実現を目指すことなどが求められた。

① 「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）

② 「何を学ぶか」

（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）

③ 「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）

④ 「子供一人一人の発達をどのように支援するか」（子供の発達を踏まえた指導）

⑤ 「何が身に付いたか」（学習評価の充実）

⑥ 「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）」

中央教育審議会 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」文部科学省 2016.12.

そこで本校では学校全体の教育活動をわかりやすくまとめるにあたり、特に資質・能力の育成に関わって①～⑥のポイントに従って整理し、本校のグランドデザイン（p19～20）とした。これまでの研究の内容をわかりやすく図示したものであり、全教職員が共通して理解している。また、将来的には生徒とその保護者にも公開し、学校・生徒・保護者が共有するグランドデザインとしての機能を持たせることを考えている。

ここでは、そのグランドデザインの中で本研究により関連の深い「資質・能力の育成」について、説明を加えたい。

何ができるようになるか

本校の学校教育目標「自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒を育成する」である。この中で「育成したい資質・能力：確かな学力」に特に関わる内容として「将来、社会的使命を果たす生徒」がある。学校の教育活動を通して育成された資質・能力を活かして、一人一人の生徒が将来社会的使命を果たすことができるようになることが、本校が目標としているところである。

「社会的使命を果たす」が示す内容は、一見広く捉えどころのないもののように思われる。そこでまず、育成したい資質・能力を新学習指導要領に示されている資質・能力に基づき、「教科等の学習の中で学んだことを社会で生かすことができる力」「全ての学習の基盤となる力」「現代的な諸問題に対処できる力」の三つに整理し、それらを相互に関連させながら育成を図り、その相互の育成の結果として「社会

的使命を果たす」ことができるようになることをイメージした。

本年度より、本校が取り組んでいる伝統文化教育は、この中の「現代的な諸問題に対処できる力」の育成をねらうものである。前述の「審議のまとめ」に「一人一人の生徒は世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる。また、伝統や文化についての深い理解は、他者や社会との関係だけではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である。」とあるように、伝統文化教育を通して、一人一人の生徒がグローバル社会でより良く生きられるようになることが目標である。

はそれぞれの力が相互に関連し合って高まっていくことが求められる。今後、本校の教育活動が目指すところとして、生徒が①学校の教育活動を通して育成したい資質・能力伝統文化教育の在り方を探った。伝統文化に関して教科等横断的に学ぶことのできる教育課程を編成し、その成果として「グローバル社会で生きるために必要な資質・能力」を育成したいと考えた。

今年度の研究では、主にこの資質・能力の育成に関して取り組んでいるが、その育成に関しては単独でねらえるものではなく、その他の2つの資質・能力(学んだことを社会生活のなかで生かすことができる力・全ての学習の基盤となる汎用的な能力)と連動して育まれるものであり、今後その育成の連携についても研究の対象としたい。

何を学ぶか

伝統文化教育に取り組むにあたって、最初に確認したことのひとつとして「何を学ぶか」がある。学習する内容はこれまでと同様、各教科等の学習内容である。各教科等の学習内容の中から伝統文化に関連する内容を扱うことを通して教科等の連携を図るが、「伝統文化について学ぶ」のではない。各教科等の学習内容を学習するためのコンテンツとしての伝統文化であることを確認した。その上でグローバル社会で生きるために必要な資質・能力の育成のために効果的なカリキュラムの編成を目指している。

どのように学ぶか

本年度の研究の現在の段階では、伝統文化教育に関わって各教科等がどのような取り組みができるのか、教科等がどのような連携ができるか、について実践を試みているところである。今後、各教科等の指導計画をより単元や題材のまとまりを重視して工夫・改善を行わなければならないと考えている。それらを踏まえた上で、生徒の立場に立った「3年間を見通した学習計画」を作成することが今後の目標である。

何が身に付いたか

「何ができるようになるか」で設定した資質・能力が、設定した学習活動を経て本当に身に付いたのかどうかを確認し、カリキュラムや学習指導の改善に生かすことが重要である。生徒自身が自らの学びを振り返ることのできる評価の場面や方法の工夫と同時に、学校全体がカリキュラムマネジメントの機能を生かすことのできる評価の方法を工夫しなければならない。今年度は、事前の研究計画に沿って年2回の生徒アンケートで資質・能力に関しての変化を見とる予定である。その他には、今年度よりモニター参加をしている「GPS—Academi:ベネッセコーポレーション」による「汎用的な能力」の調査の活用についても、今後より具体的に検討していく予定である。

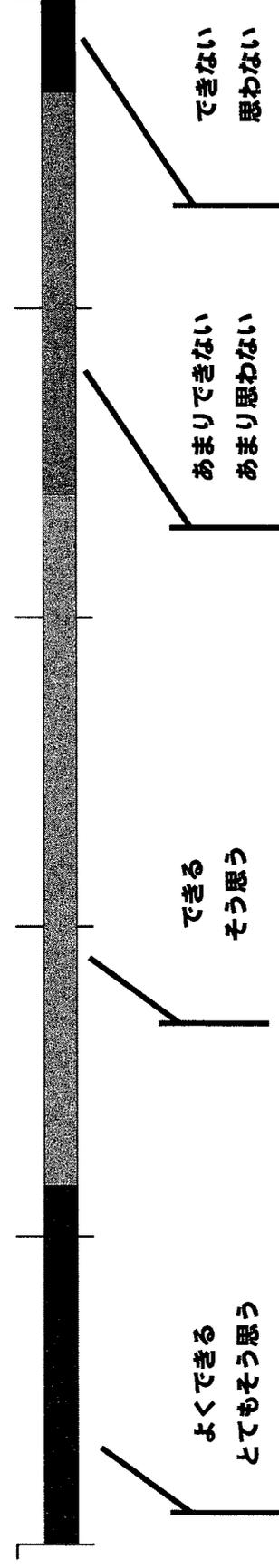
今後の研究では、何をどのように学ぶのかということに関する実践研究と並行して、多様な評価の方法について検討できる実践を重ねたいと考えている。それらの成果を重ね合わせつつ、目標である「何が

できるようになるか:社会的使命を果たすことができる」がどのように実現できているのかを振り返り、よりよいカリキュラムの開発へとつなげたい。

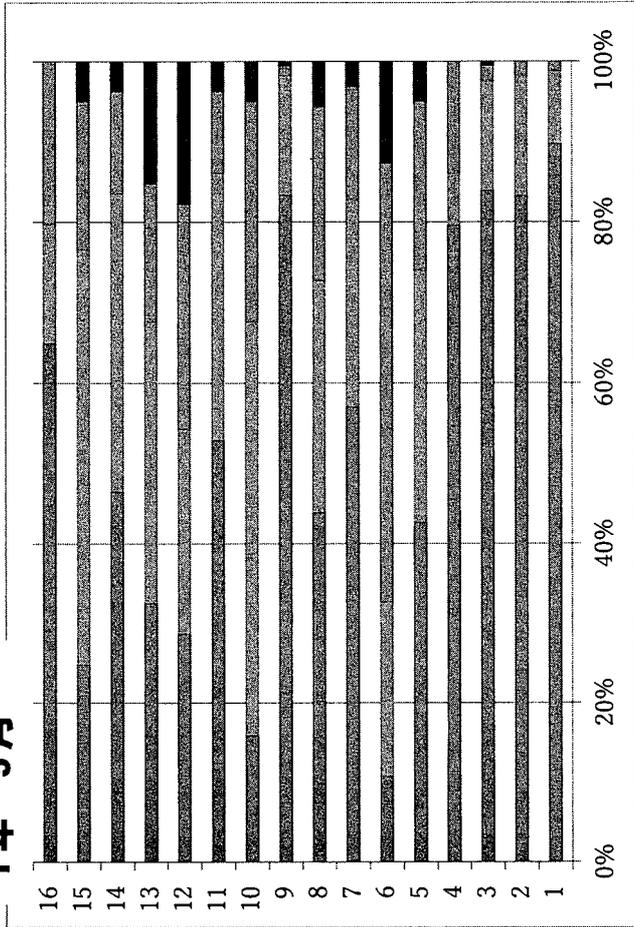
本年度、グランドデザインを試作し、研究の方向性も含めた学校の教育活動全体一つの表とした。育成を目指す資質・能力を明確にし、常に教育活動全体についての検討と改善を重ねていくことが目的である。今後は、このグランドデザインの趣旨を生徒・保護者・地域とも共有しつつ、カリキュラムの編成の工夫や日々の授業改善に生かしていきたい。

アンケート内容（選択式） 5月と12月、全校生徒を対象に実施

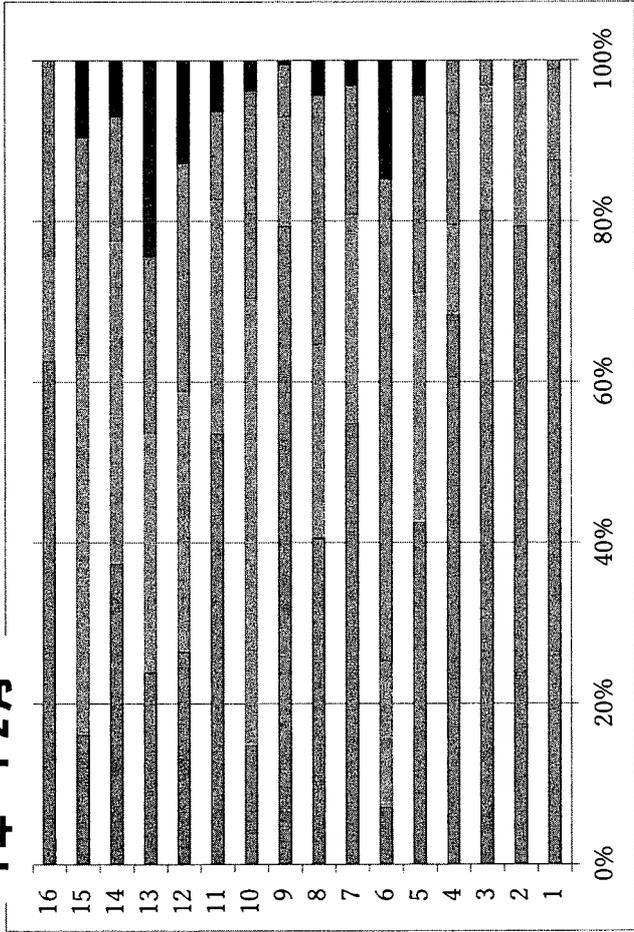
- (1) 日本で生活していて、よかったと思う。
- (2) 日本の伝統や文化は世界に誇れるものだと思う。
- (3) 日本の文化を大切にし、将来も残していくべきだと思う。
- (4) 日本の伝統や文化を実際に体験したことがある。
- (5) 日本の伝統や文化に関する学習に興味・関心がある。
- (6) 日本の伝統や文化について、外国の人に日本語でわかりやすく説明できる。
- (7) 日本の伝統や文化について、外国の人に伝えたいと思う。
- (8) 外国の伝統や文化について、興味がある。
- (9) どの国の伝統や文化も同じくらい大切だと思う。
- (10) 相手の立場を理解して、自分の知っていることをわかりやすく伝えることができる。
- (11) 外国の人と友達になったり、外国のことについても知ったりしてみたいと思う。
- (12) 将来、外国へ留学したり、国際的な仕事に就いてみたいと思う。
- (13) 今住んでいる地域の行事に参加している。
- (14) 地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある。
- (15) 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある。
- (16) 地域社会などでボランティア活動に参加したことがある。



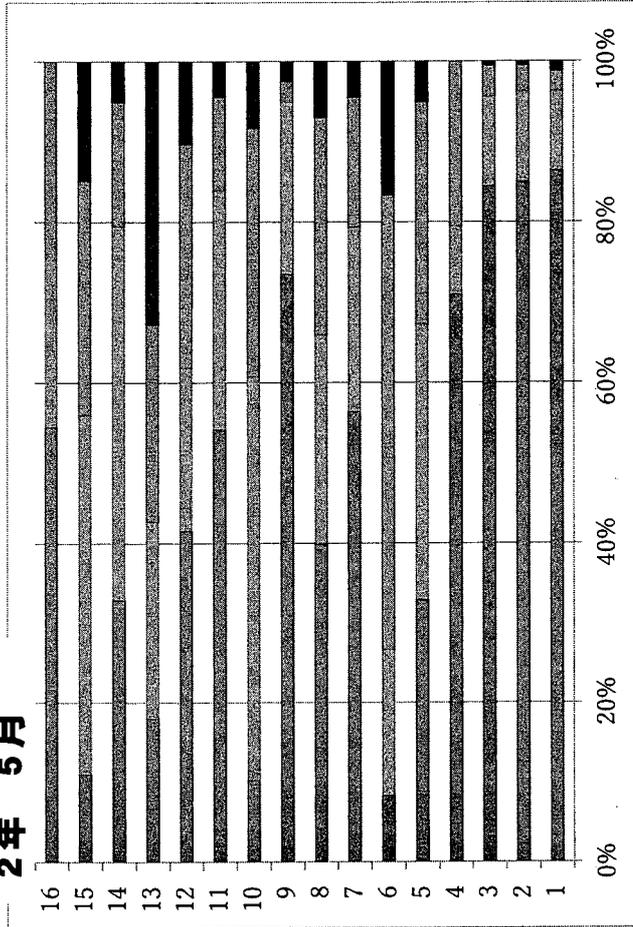
1年 5月



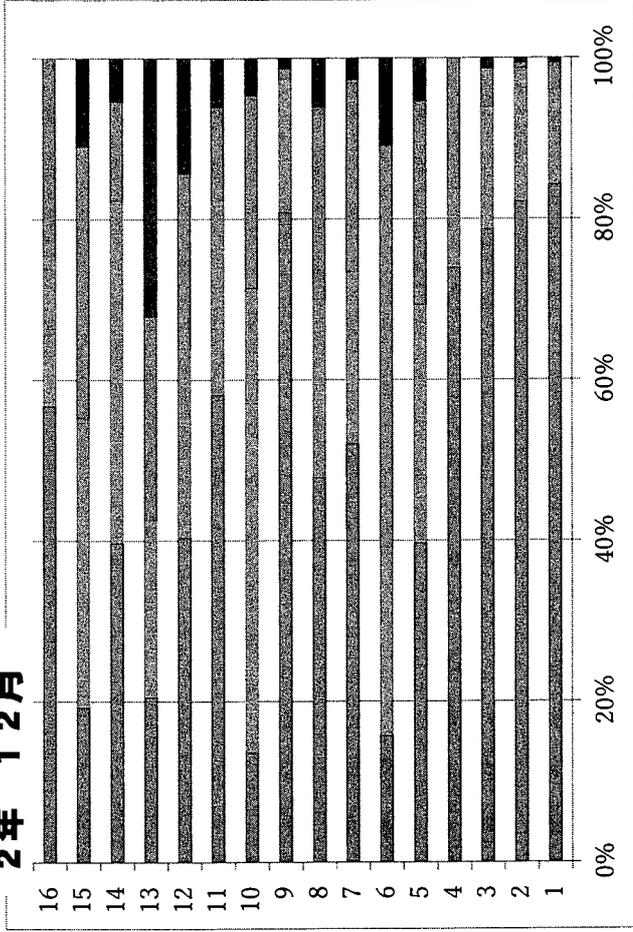
1年 12月



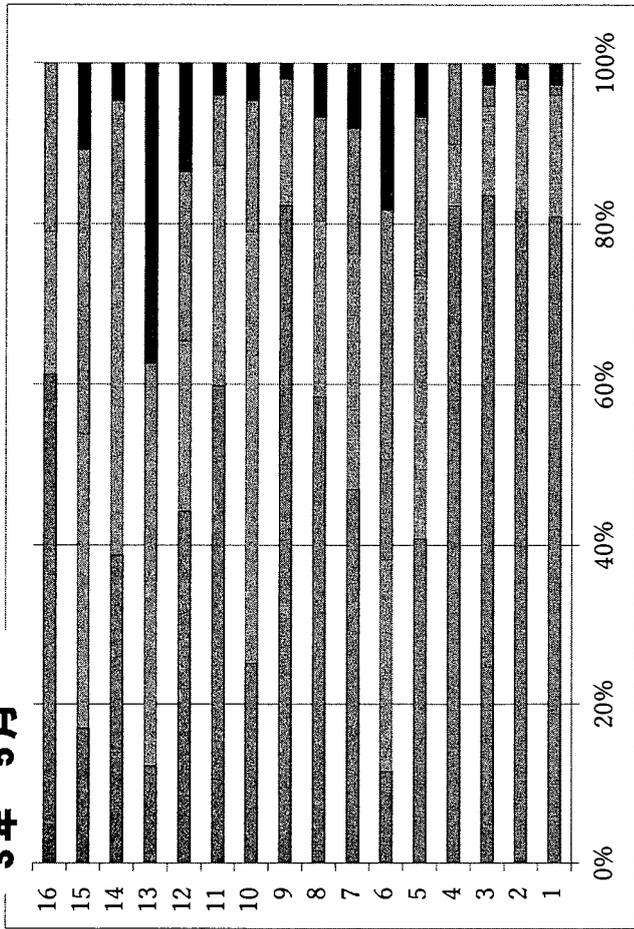
2年 5月



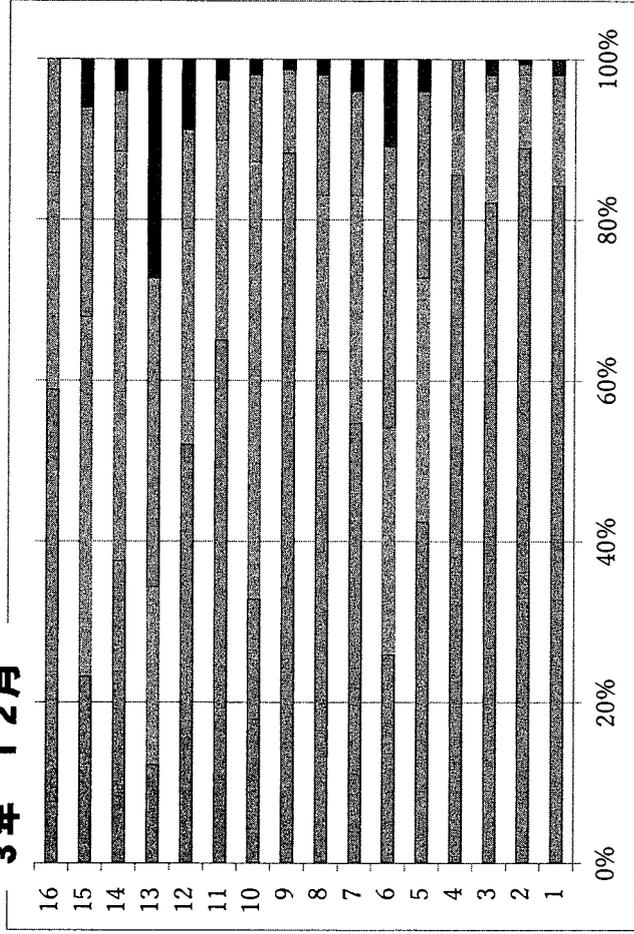
2年 12月



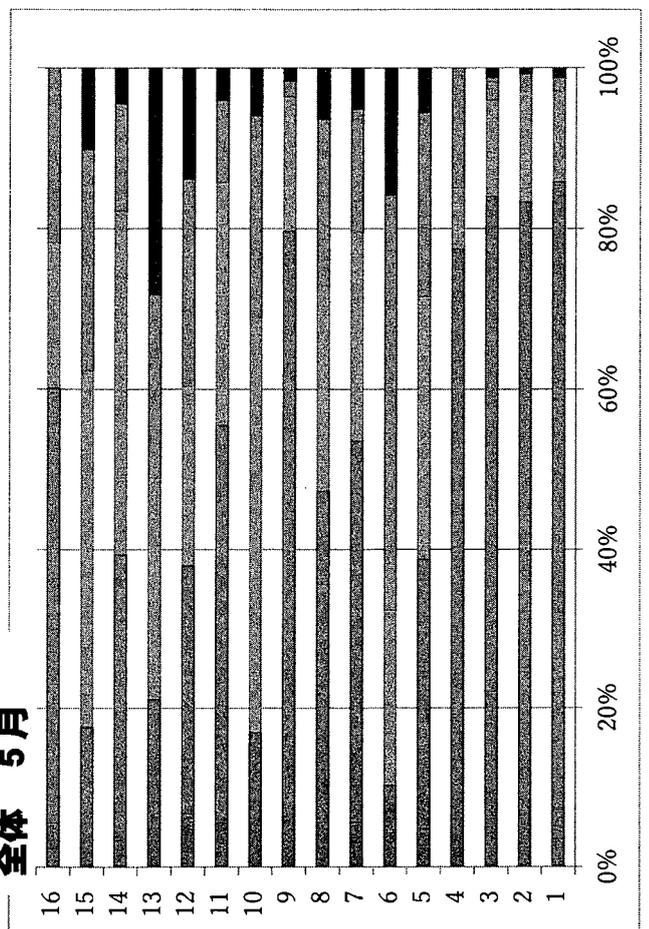
3年 5月



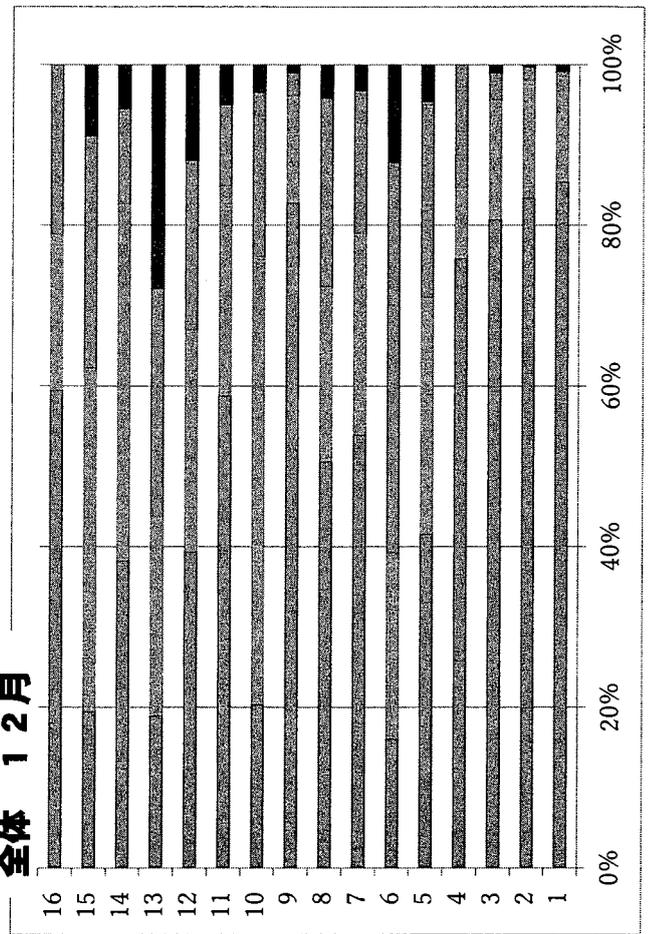
3年 12月



全体 5月



全体 12月



(6) 今年度の成果と課題

①成果

- ・日本の伝統文化について、生徒の意識や現状などについて明らかになった。
- ・全ての教科等で伝統文化に関わった授業実践を持つことができた。
- ・各教科等のねらいを達成するために、どのような伝統文化に関わる実践が効果的であるのかを検討することができた。
- ・伝統文化を柱として、教科が連携して取り組むことのできる単元・題材を検討することができた。

②課題

- ・生徒や保護者と学習の目標を共有したり、生徒自身はその成果を評価したりする仕組みができなかった。
- ・伝統文化教育を通して育まれる資質・能力の変容を明らかにするための、多様な評価について検討できなかった。

今年度は、伝統文化教育に取り組む初年度として、第一の目標として、実践の数を多く持つことを掲げた。その結果、学校保健を含む全ての教科等で全ての教員による伝統文化に関わる授業実践を持つことができた。またそれらの実践は、複数教科等で連携が図られたものであり、今後、その成果を3年間の学習計画として形にしていく計画である。

また5月と12月に実施したアンケートによって、伝統文化に関する生徒の意識や実態を明らかにできた。一方、伝統文化教育によって生徒にどのような資質・能力の変容が見られたかということに関しては、明らかにできなかった。今後、アンケートの内容を始め、多様な評価の在り方についての検討が重要であることがわかった。

本校の教育目標や教育研究、その他の教育活動を本校のグランドデザイン（p19～20）として表した。今年度は、この表の作成に力を注ぎ、表の活用までは至らなかった。今後は、この表をもとにして、学校教育の教育活動に関わる生徒・保護者・地域・教職員が目標を共有して日々の活動に臨みたいと考えている。

「学校教育目標」と「平成29年度重点目標」に向けて

自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒を育成する。

目指す生徒像

自ら考え学ぶ生徒 お互いに認め合い、助け合う生徒 心身ともにたくましい生徒

- ・ ESD を基盤にしなが、各教科等の連携による体系的な伝統文化に関する教育実践研究を行う。
- ・ 生徒会活動・学級活動等の場面で生徒の自主的・主体的な取り組みを引き出す。
- ・ 大学院教職実践研究科との連携の在り方を整理しつつ、より一層充実した協力・指導体制を構築する。

豊かな人間性

自分を律しつつ、思いやりの心を持ち、よりよい人間関係を築いて共に生きて行こうとする態度で、将来に向け自己実現を図っていく生徒。

- ・ すべての教科等が連携して行う道徳教育の充実
- ・ 生徒会活動、学級活動、学校行事など生徒が主体となって行う活動
- ・ 地域や国内外の学校との交流

健康・体力

自他の安全に配慮し、心身の健康に対し主体的に関わる生徒。

- ・ 教育活動全体で行う安心・安全な環境の整備
- ・ 家庭や地域と連携した、健康教育の推進
- ・ 教育相談の充実

資質・能力の育成

確かな学力

目指す子供の姿

グローバルな視点を持ち、
他者と協働して問題を解決する姿

何ができるようになるか

社会的使命を果たすことができる。

- ・ 学んだことを社会生活のなかで活かすことができる。
- ・ すべての学習の基盤となる汎用的な能力。
- ・ 現代的な諸問題に対処できる力。

⇒グローバル社会で生きるための資質・能力

何が身についたか

生徒自身が自らの学びを振り返る。

○学習評価を通じた学習指導の改善

- ・ 教育課程や学習・指導方法の評価と改善を行う。
- ・ 多様な学習活動を対象とした、多面的・多角的な評価を行う。

子供の実態

学習全般に関する学習意欲は高いが、
学んだことを他者と共有する力が弱い。

何を学ぶか

各教科等の枠組みを踏まえた学習内容を学ぶ。

○教育課程の編成

- ・ 伝統文化を題材として、各教科等を横断して学ぶことのできる教育課程を編成する。

どのように学ぶか

3年間で身に付ける資質・能力を明確にして学ぶ。

○教育課程の実施

- ・ 単元や題材を見通した学びの工夫をする。
- ・ 伝統文化を通して、社会とつながる課題を設定する。

子供の発達をどのように支援するか

○配慮を必要とする子供への指導

- ・ 全職員の協働的な関与と支援
- ・ 附属特別支援学校や金沢大学教員の協力
- ・ 附属学校園との情報共有や連携
- ・ 外部の専門機関との連携

実施するために何が必要か

- ・ 校内研究会の充実
- ・ 国立教育政策研究所をはじめとした研究機関等との協力
- ・ 金沢大学との研究協力。
- ・ 地域や家庭、海外提携校との連携・協働

安心・安全を守る

- ・ いじめ防止基本方針の策定。
- ・ 避難訓練などの実施と工夫改善。
- ・ 各種講習会などにおける外部団体の協力
- ・ 保護者や外部の人材を活用した安全対策の充実。

開かれた学校づくり

- ・ オープンスクールや懇談会などを活用した、地域・家庭との連携。
- ・ 教職大学院との協働
- ・ 学校公開、学校説明会の充実
- ・ 学校評議会
- ・ 金沢大学（附属学校園運営委員会や学類教員など）との連携
- ・ 研究成果の国内諸学校、教員への提供